

平成 22 年 4 月 19 日現在

研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2005～2008
 課題番号：17402017
 研究課題名（和文）オーラル・ヒストリーの手法を用いた第二次大戦と脱植民地過程の再検討
 —植民地兵士と在留者・抑留者の口述資料収集と史資料との照合
 研究課題名（英文）Reconsidering WWII and the process of de-colonization by utilizing
 the oral history method
 研究代表者
 根本 敬（NEMOTO KEI）
 上智大学・外国語学部・教授
 研究者番号：90228289

研究成果の概要（和文）：

これまでほとんど研究の対象とされてこなかった第二次大戦を経験した旧植民地の兵士や在留者および抑留者を、それぞれの研究者が探しだし、オーラルヒストリー（聞き取り）の方法を用いながら彼らの戦前戦中戦後の経験の語りをそのまま録音・記録し（可能な場合は録画もおこない）、文献資料との照合が可能なものについてはその作業をおこない、論文その他の成果刊行物にまとめた（現在も進行中）。とりあげた植民地は英領ビルマ（一部インド）と米領フィリピンで、関係者（旧植民地兵士、英系ビルマ人）の聞き取りは両国のほか英国、ニュージーランド、ケニア、台湾、米国におよんだ。研究者相互の情報交換を密にし、今後の総合的な成果発表を目指す基盤を築いた。

研究成果の概要（英文）：The members conducted interviews with the ex-colonial soldiers and the residents as well as the detainees who experienced WWII in Burma (partially India) and Philippines. Those interviewees were not only the Burmese and the Philippines but also the Anglo-Burmese, the Kenyans and the Taiwan Chinese. The discourses of their memories were recorded directly and were checked up with the documented records (such as administrative records) as possible as we could. The members exchanged their outcomes in close cooperation and constructed the base for future publications of their academic results.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	4,600,000	0	4,600,000
2006年度	3,800,000	0	3,800,000
2007年度	3,200,000	960,000	4,160,000
2008年度	1,800,000	540,000	2,340,000
年度			
総計	13,400,000	1,500,000	14,900,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学・国際関係論

キーワード：オーラル・ヒストリー、ビルマ戦線(連合軍ケニア人兵士、日本軍台湾人兵士)、英系ビルマ人、フィリピン軍兵士（第二次世界大戦時）

1. 研究開始当初の背景

第二次世界大戦に何らかの形でかかわりながら、ほとんどその存在が組織的に記録されていなかった人々の記憶を、オーラルヒストリーの手法を用いて記録する重要性が認識されるなか、関係者が存命中にそれを実施する喫緊の必要性があった。

2. 研究の目的

これまでの歴史の「語り」の中心をなしてきたものは、帝国主義の抑圧と従属民族による解放闘争（独立闘争）という枠組みであった。しかし、その枠組みでは見落とされてしまう存在として植民地軍兵士（同じ宗主国の植民地から別の植民地へ派遣された者を含む）や、宗主国と土着民族との間に生まれたハーフなどが挙げられる。自分たちとは関係のない戦争に兵士として動員されたり、ハーフだという理由だけで抑留などの苦難を経験させられたりした人々たちである。このような人々に注目し、彼らがどのように第二次大戦に巻き込まれ、戦後いかなる記憶を形成していったのか、そのことを知るために聞き取りをおこない、かつ可能な範囲で文献資料と照合をおこなう。この作業を通じて、国民史として展開されてきた各国における戦後史の叙述において、「国民」の受難と抵抗という枠組みにあてはまらないがゆえに注目をあびることのなかった人々の経験と語りを記録に残し、戦後の脱植民地化過程の多様な検証の可能性をいっそう高めることを目的とする。

3. 研究の方法

具体的には、旧英領ビルマと、旧米領フィリピンを調査対象とした。大戦中にイギリス帝国と日本帝国（ビルマ）、アメリカ帝国と日本帝国（フィリピン）がそれぞれ統治権を争うなか、ビルマに関しては英領ケニアからビルマ戦線に派遣された植民地軍兵士と日本軍によって動員された台湾人兵士、および日本軍とビルマ人ナショナリストの両方から抑圧を受けた英系ビルマ人（ビルマ国内残留組とインド避難組）に注目し、またフィリピンに関しては米側についたフィリピン人の植民地軍兵士と日本軍に動員された台湾人兵士それぞれに着目した。いずれも戦争中の経験のみならず、戦後の脱植民地化過程における体験を個人の記憶を核に語ってもらいオーラルヒストリーの形式で記録に残すことを試みた。その際、相手の承諾が得られれば、録音だけでなく録画もおこなった。並行して、これまでの文献資料に基づく研究を振

り返るほか、新たな文献調査をおこなうことによって、彼らの「語り」を可能な範囲で文献資料と照合する作業もおしすすめた。

4. 研究成果

ビルマ戦線に関しては研究代表者の根本と研究分担者の中尾が専門に担当した。研究分担者の浅野も台湾人兵士という共通のキーワードをもとにビルマとフィリピンの両方を担当した。根本は戦時中の英系ビルマ人に焦点を合わせ、国内残留組（約1万人）とインド避難組（約1万人）のうち、現在も生存している者と聞き取りをおこなうべく、ビルマ、オーストラリア、ニュージーランドおよび英国を訪ね、計24名と会ってインタビューをおこなった。その際、本科研を開始する以前の2004年までにおこなった文献調査をもとに得た成果を参考にして質問事項を作成し、各個人に簡潔なライフヒストリーを語ってもらったうえで、日本占領期の経験と戦前・戦後の生活に関する質問をした。文献では日本軍および日本人（そして日本国家そのもの）に対する厳しい感想や分析が目立ったが、聞き取りでは、基本的に同じような傾向が見られるものの、部分的に「良い思い出」も含まれ、そこには多様性が見られ、「集合記憶」としての反日（嫌日）と「個人記憶」のそれとの差異が微妙であるが認識することができた。また、英国に対する思いも複雑で、文献記録において確認できる多様な英国観が、聞き取りでも再確認することができた。現在、かつて発表した文献資料に基づく英系ビルマ人の大戦期の様相と彼らの歴史に関する研究論考を基にして、本科研で得た聞き取り調査の成果を加え、英系ビルマ人コミュニティの戦時および戦後の「語り」についてまとめた研究論文を執筆中である。

一方、中尾はビルマ戦線に動員された英領ケニアを中心とするアフリカ植民地兵士に着目し、大戦中に出兵したケニア人兵士・軍属・家族の口述資料を収集のうえ、文書資料と照合し、対日戦を核とする彼らの戦争体験の内容把握を試みた。その結果、極東戦線と西アフリカ戦線の部隊で戦った兵士らの生存者を捜しあてることに成功し、彼らの生の経験と、戦前戦中戦後のライフヒストリーを分析する資料を確保した。また、彼らを引率した英国人将校の心情や対アフリカ理解に関する口述も記録できた。さらにアフリカのアーカイブにだけ残る貴重な資料や双方の観点でつくられた戦後記録のビデオ資料の存在も確認した。これらの調査を通じ、現代の英国における公的なイギリス植民地兵士

の位置づけ（「アフリカ兵士は喜びとともに自由のために戦った」とは非常に異なる側面を観察し、また日本国が好む「日本がアジア・アフリカを独立させた」という言説を実地に再検証する資料を得た。これらの口述記録は従来の歴史観と国際認識を変えるインパクトを持ち、今後は資料の翻訳の共有化やアフリカ諸国調査のいっそうの充実化、そしてほかの帝国の植民地兵士との比較を通じた脱植民地化過程の検討を予定している。

フィリピンを扱った研究分担者の中野は、米国に移住したフィリピーノ第二次大戦ベテランとその問題について調査をおしすすめ、トランスナショナル化した在米フィリピーノ・コミュニティの運動とベテラン問題が結びついた現状を精査するとともに、この問題に関して、当のベテランたちがどう生きてきたかに焦点を合わせ、研究を展開した。その成果は、2007年に発表した著書『歴史経験としてのアメリカ帝国』の中核である第7章として結実し、同書は2008年大平正芳記念賞を受賞した。ベテラン支援運動関係者のあいだでも中野の英語論文はこの分野における唯一基本的な学術文献として広く利用され、その研究は内外で一定のインパクトを認められている。今後は、オバマ政権発足後のアメリカ景気回復・再投資法（2009年）に盛り込まれたフィリピーノ・ベテランに対する一時金の支払いに対する関係者の複雑な反応について、調査研究をすすめていくことになる。

ビルマ戦線とフィリピン戦線の両方においてそれぞれ日本軍に動員された台湾人兵士に着目した研究分担者の浅野は、日本人および朝鮮人兵士も含めた関係者への聞き取りをおこない、その成果を2点の業績にまとめた。ひとつは「北ビルマ・雲南作戦と日中戦争」（掲載書籍名は5番を参照）であり、同論文では純粹な軍事史の観点に立ち、オーラルヒストリーの成果をふまえ、ビルマ戦線における日本軍の現地気候に合わせた定住や移動作戦を整理しつつ、それを中国大陸の一号作戦や日本本土決戦という大作戦のなかに位置づけた。もうひとつは「北ビルマ・雲南戦線における日本軍の作戦展開と『慰安婦』達」（同）であり、この論考ではオーラルヒストリーの成果を盛り込んで、生き残った慰安婦たちの帰還と、死去した慰安婦たちの行動を対比させつつ、戦場の軍事作戦の文脈を踏まえて、慰安婦と軍隊組織との関係を論じた。ジャーナリズムの関心の高い慰安婦問題を戦場の文脈で論じたこの論文は、軍事史のなかでは高い評価を受け、軍事史学会の日中戦争再論というシリーズへの掲載が認められた。一方、フィリピン戦線において活動した台湾人兵士の手記を入手し、出版に向けて現在努力中である。「カラバオ」（タガロ

グ語で「水牛」の意）と現地人から呼ばれた日本軍のなかの台湾人兵士が、フィリピン華僑やアメリカ兵、フィリピン兵の入り混じる戦線で戦ったことがリアルに示されている。このほか、台湾においてビルマから帰還した兵士が作った戦友会組織と連絡がとれ、できるかぎりのインタビューを試み、その一部をテープにおこして、出版する計画を立てている。

以上の各研究者の成果をふまえ、今後は総合的な成果を収めた論文集ないしはそれに順ずる刊行物をまとめる準備をすすめるほか、各人が集めた聞き取りの記録の保存のあり方を考え、将来、何らかの形で公に利用できるような方策を考えるつもりでいる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計6件）

NEMOTO, Kei, “Between Collaboration and Resistance: Reconsideration of the Roles of Ba Maw and Aung San in their Context of Asserting Burmese Nationalism”, in Kei NEMOTO (ed.), *Reconsidering the Japanese Military Occupation in Burma (1942-45)*, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 査読無, 2007, 1-27.

根本敬 「東南アジアにおける“対日協力者”：“独立ビルマ”バモオ政府の事例を中心に」、倉沢愛子責任編集『岩波講座アジア・太平洋戦争』第7巻、査読有、2006年、313-344頁。

NAKANNO, Satoshi, “The Filipino World War II Veterans Equity Movement and the Filipino American Community”, *Pacific and American Studies*, 査読無, vol. 6, 2006, pp. 53-81.

NAKANNO, Satoshi, “South to South across the Pacific: Ernest E. Neal and Community Development Efforts in the American South and the Philippines”, *Japanese Journal of American Studies*, 査読有, No. 16, 2005, pp. 181-202.

浅野豊美 「北ビルマ・雲南作戦における日本軍の作戦展開と『慰安婦』達」、軍事史学会編『日中戦争再論』、2008年3月、査読有、296-322頁。

浅野豊美 「北ビルマ・雲南作戦と日中戦争」、波多野澄雄・戸部良一編『日中戦争の国際共同研究2 日中戦争の軍事的展開』、慶応義塾大学出版会、査読有、2006年、297-338頁。

[学会発表] (計7件)

根本敬 「近代ビルマ史のなかの英国と日本」、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究プロジェクト「脱植民地化の双方向的歴史過程における『植民地責任』の研究」、2007年11月10日、東京外国語大学

根本敬 「植民地ナショナリズムの光と影：ビルマのタキン党と英系ビルマ人」、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所主催 AA 研フォーラム、2007年3月22日、東京外国語大学

根本敬 「英系ビルマ人たちの第二次世界大戦の記憶をめぐって」、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所政治文化研究ユニット研究会、2007年3月19日、東京外国語大学

中尾知代 「忘れられた声：第二次大戦のアフリカ兵士たち」、国際オーラルヒストリー学会、2008年9月、グアドラハラ大学 (メキシコ)

NAKANO, Satoshi, “The Lost City: Carmen Guerrero Nakpil and the battle for Manila 1945”, The 8th International Conference on Philippine, July 24, 2008, Escaler Hall, Ateneo de Manila University, Loyola Heights Campus, Quezon City.

NAKANO, Satoshi, “Battle for Manila: A Japanese View”, Truths and Memories of World War II: The Nanjing Massacre and the Battle for Manila, March 18 and 19, 2008, Ateneo de Manila University, Loyola Heights Campus, Quezon City.

NAKANO, Satoshi, “Memory and Mourning: The Six Decades after the Two Wars”, The First Philippine Studies Conference of Japan, November 11, 2006, Tokyo Green Palace Hotel.

[図書] (計7件)

根本敬 (共著：ジャック・チャーカー著、根本尚美訳、小菅信子編著、朴裕河共著) 『歴史和解と泰緬鉄道』、朝日新聞出版、2008年、296+5頁。

根本敬 (共著：川島真、貴志俊彦編著) 『資料で読む世界の8月15日』、山川出版社、2008年、264+v頁。

NEMOTO, Kei (ed.), *Reconsidering the Japanese Military Occupation in Burma (1942-45)*, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2007, pp. 236+vii.

中尾知代 『日本人はなぜ謝りつづけるのか：日英<戦後和解>の失敗に学ぶ』、

NHK 出版、2008年、253頁。

中野聡 (共著：永原陽子編) 『「植民地責任」論：脱植民地化の比較史』、青木書店、2009年、366-392頁。

中野聡 『歴史経験としてのアメリカ帝国』、岩波書店、2007年、468頁。

中野聡 (共著：記録編集委員会編) 『南京事件70周年シンポジウムの記録』、日本評論社、2009年、152-162頁。

[その他] (計3件)

浅野豊美 (座談会：藤原帰一、高橋哲哉、平野健一郎と共同) の司会と報告「歴史と記憶」、中京大学評論誌『八事』第25号、中京大学、2009年3月。

浅野豊美 「日本とアジア：自分の足元で」、朝日新聞論壇時評、2008年1月10日。

浅野豊美 (評論) 「私と戦争、そしてビルマから愛知万博へ」、中京大学評論誌『八事』第22号、中京大学、2006年3月。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

根本 敬 (NEMOTO KEI)

上智大学・外国語学部・教授

研究者番号：90228289

(2) 研究分担者

中尾知代 (NAKAO TOMOYO)

岡山大学・文学部・准教授

研究者番号：40207717

浅野豊美 (ASANO TOYOMI)

中京大学・文学部・教授

研究者番号：60308244

中野 聡 (NAKANO SATOSHI)

一橋大学・社会学研究科・教授

研究者番号：00227852